

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	秋の山ぶみ : 雑録
Author(s)	枕水
Citation	龍南會雑誌, 76 : 65 - 70
Issue date	1899-12-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5458
Right	

とさなり。然れども、吾は最も菊花を愛す。たいそれわれは最も菊花を愛すれども、我國民は、誰彼の差別なく、皆もろどもに此菊花を愛せざる可らず。其は、菊花は、賢くも、わが皇室の御統章なればなりと。(十一月十二日作)『日本新聞』に負ふところあり。

秋の山ぶみ

枕 水

『柿落ちて詩興頗に動く、訪ふべきは草庵の殊なり。鴉啼いて野趣更に深し、遊ぶべきは田園の景なり。』この一節は出立のイントロダクションとして、十二分の價値を有えて居る。

童顔呵々とて罪もなく笑ふは、例の狂詩人。亂髮蓬の如く頻りに詩吟に耽るは、枕水生にて、われ等一行は將に、狂詩人の寓を見すてんとて居るのである。柿の葉の黃色を帯びて、何ともいはずれもしろいのを後にじて、藤崎の前を眞一文字に横ぎり、廣町の角を右に曲つて、池田に出やうとした。

大い、廣い、長い坂を登りつめて、又少し降つて行きつめた處が、池田である。

今ぞも氣車が運轉を始めやうとて、急がしけに氣笛を鳴らし、控處の小口には、無數の群集が押しあつて居る。

われ等は停車場の後を左に曲つて歩を進めた。

縣瀧廊落。秋色寂寞たる野中に、一條の小川があつて、水がさら／＼と／＼やいで居る。愛らし

ま、子供が余念なく垂れて居る釣竿に、蜻蛉が一つ止まつて居る。われは杜工部の蜻蛉立釣絲といふ句を聯想して、一種の詩趣に打たれた。

釣竿に蜻蛉一つ止りけり、

其の片はまに、くわわが二三本咲いて居て、花の下に小魚の一群が遊んで居る。其の魚の背を斜めに光線がさして居るといふ描梅で、妙に詩的なのである。

くわわ咲く里の小川の淺くまて群れ居る魚に日かげさすはや

向ひに葉ぶきの家が見える、軒端にアマボシがいくつとなく吊まてある。籬の中に大い、高い柿の木があつて、葉もない枝に赤くなつた柿が、無數にブラさがつて居るが。小供が竿をもつてそれをつたさ、落さうと騒いで居る。小狗が其傍に尾をふつて立つて居る。

田夫が馬を牽いて來た。其の馬が鳴いた。其聲が秋の寂寞を破つた。

紅楓雨を経て、紅いよ／＼紅なりといへば、何だか漢文くさいやうだが。

閑引吟 鈴歩野頭、山村到處望悠々、料知昨夜半窓雨、染出紅楓千樹秋、
マアこんな物であらう。

杉のコンモリと茂つた、間から、鎮守の社がちらはらと見えて居る。

こんもりと茂れる杉の絶間より村の社の華表はの見ゆ

路は一轉して田園の中に入つた。

君見玉へ、かしてに見ゆる、茅茨の様の淋えき事よ。かたへに立てる、銀杏の葉の黄みたる事よ。戸口に戯れたる、小狗の様の無邪氣なる事よ。君はこれ等の景を何とか見玉ふ。見よ、かの白雲、

見よかの飛鳥、あゝこの寂寥、あゝこの閑靜、君はウォルツオルスのライダル山頭に似たりと、思ひ玉はずや。

狂詩人はかく言ふた。

しかり。とわれは答へた。かゝる淋えき山里に隠れ居て、一生ハイチーを供とえたらばやとも思ふた。悠々千古の意、菊を採りて南山を見ると云ふた、五柳の居も亦かくの如きものなつたらう。

半村雲絶望西東、處々紅楓處々紅、行盡山家三里路、數聲犬吠夕陽中、

山下一帯は稻田ついで、稻は殆ど蒔りつくされて、稻城が三つ四つ積みあげられて居る。案山子は倒されて、あたりの泥の中にはめられて、無残な最後をどけて居る。

山途勾配急、處々見岩根、極目秋千里、眼中楓一村、天高雁影小、日暖雀聲喧、吟杖好何地、犬鷄竹裡門。

山川に出合つた。水車がガタ／＼といつて居る。こゝにも小屋の背戸に柿の木があつて、鴉が五六羽熟柿をつゝいて居る。

繼柿に首傾けし小鴉を里のうなむはどらんとすなり

重簪が居りもせぬにと、狂詩人はぬからず攻撃の矢を放つた。これが所謂詩人の法螺だと、われは、すかさず答へた。

路傍に松の一本たつて居るのを見て、

めづらくは岡の姫松しかはあれど五百枝ささふ老松われは

これは狂詩人の作である。渠は萬葉の遺跡を得てるといつて、頗る得意の様である。

小さい石段があつて、何となくくゆかしい家が見ゆる。石礫もあるやうだが、苔がかぶつて一字も讀めない。枝折戸をくいつて無遠慮に、はいると、相應に大い草葺の家がある。即このあたりで名高い、成導寺なのである。

前の一面は垣があつて、大根や野菜やいろんな物が作られてある。垣の端に、山茶花が二三輪咲いて居るのが、風もないのに、パツサリと落つる様、一入の開靜を添ゆるのである。

垣の下に一輪咲ける山茶花の、花おつらまも吹く風なしに

相應な廣さの泉水が庭の中にある。水は澄みきつて居る。其の背後は全く山ついで、鳥の淋まうに啼くのが、手に取るやうに聞ゆる。すると、せきれいが一羽、岩の上に止まつて、尾を二つ三つ振り廻して、間もなく去つてしまつた。空院落閑落、幽庭水獮流的の趣味である。

われ等は回廊の上に腰を据ゑて、いろ／＼な空想に沈んだ。山里は淋しい、山門は靜かな等、いふ考へは此際われ等の胸中に浮び出でた、サイコロザカル、ソエノメナであつた。

君よ、君はこの靜瑟なる景色を何とも感じ玉はぬか？

われは、狂詩人をかへり見てかく叫んだ。

まかり。この靜瑟は人類の未だ生れざりま以前の靜瑟にまて。この寂寥とこの閑靜とは、人間に向うて沈黙の中に、無限の意味を示しつつあるに非ずや。

われはかれの答ふるを待たすして、かく叫んだ。

されど君よ、この寂寥もこの閑靜も、必ず一度は滅亡すべき時期の到達をおもふ時は、悚然として戰慄する事なきを得るか？

われ等は此の如き取りどめもなき空想より、最終には人生問題までも研究せんとしたが、終に無益な
といふ事に氣がついてしまつた。

食に甘脆なま、寶鼎あるがために非ず。室に瑟琴なし、松風あるが爲にあらす。

鳥啼ひて山更に靜かなり、その境桃源に似たり。南軒背をあふつて禪書をよむ、その人仙の如し。
これは老僧と庵室との様を、寫したつもりである。

籬邊日暖竹叢疎、閑靜不如五柳居、僧與鹿麋分半榻、白雲深處讀禪書、
山門寂寞晚陽斜、半榻松風好煮茶、霜葉滿庭人不掃、老僧坐處白雲多、

われはやたらに四角の字を併べて見たが、一向氣に合つたのが出來ないので落膽した。

寺の脊戸に廻ると、其處にも此處にも、墓がころげ合つて居る、二三百もあるといへば少し法螺か
も知れないが、六七十位は確かにあつたとなもふ。苔一面になつて、何年前に建てられたとも、知
れないのもあれば、至つて新しいのも、二つ三つあつたやうに覺える。山茶花と龍膽どが、見事に
さまませられて居るのも見れば、折々參つて來る人もあるのであらう。地震のときは、幾百の枯骨
が一時に動くであらう。

無數の鬼は、地獄で秘密會議を開いて、人生をこの暗黒なるおそろしき墓の中へ、引き込むので
はあるまいか。この如き感は、たえずわれ等の胸中を往來した。

古墓の空地に白き萩の花

わけもわからぬ句を唸つて居る中に、日は全く暮れてしまつて、寂寞は一層物さびまさを加へた。
秋の夜の片破月が、山間を照して、われ等はゾツとするほど寒さを感じた。

われ等は節を曳きかへした。路も知らない山里をたどつて行くと、何だか妙な氣持がして、足も變に重いやうに考へられる。

最前の水車も何も目に入らないで、ヤットの事で野原へ出た。月が一面に輝いて、草葉の露がきら／＼と光つて居る。天地は晝間の活動より引きかへされて、安息の樂境に入らうとして居る。夜の神は、宇宙の萬象に向つて、温和なる慰藉を與へつゝある。

雁が鳴く。砧が聞ゆる。風が吹く。犬がはゆる。

江山何處々、詩客幾銷魂、短笛烟中星、寒砧月下門、松風度墟落、犬吠滿孤村、鄉信近來絕、我心誰其言、

月はこの暗愁を外にまて、いよく高くすみわたつた。草原は全く蟲のこゑに、埋められた、池田についた。

草庵に歸りついたのは、九時すぎであつた。山路をぶらついた爲か、夜の空氣に打たれた爲か、この夜何となく、寝びつかしかつた。

河口敬信君を懷ふ

The path of glory leads but to the grave,.....Gray

木 南 生

萬木共に白露の霜となるを悲まむ今日此頃、我が親なき友なる河口敬信君は、やり水より立つ烟